

まっすぐの、まなざし 山田洋次監督との出会い

乾 千恵

物心ついた頃から、映画「男はつらいよ」シリーズの大ファンです。三歳の頃、映画館で私がいかに大きな声で笑うので、他のお客さんがふり返えるほどだったそうです。

それから、もう数え切れないほど寅さんに会ってきました。全五〇作のシリーズを、少なくとも4クールは観ています。

冒頭の夢から旅、女性との出会いと涙、柴又での大騒動：おなじみの展開なのに、記憶にすっかり刷り込まれているのに、映画の中の人たちに（何と言っても、寅さんに！）会いたくなって、観てしまう。わかっているのにヤメラレナイ、ですね。

山田洋次監督の作品で好きなのは、「寅さん」の他にもたくさんあります。「家族」、「同胞」、「運がよけりゃ」、「幸せの黄色いハンカチ」、「学校」シリーズ、「虹をつかむ男」、「武士の一分」、「おとうと」、「母と暮らせば」、「家族はつらいよ」シリーズ、等々。どの映画も、見終わった後、しみじみ温かい気持ちに包まれます。

三〇数年前、「息子」の上映会の時に、山田監督に初めてお会いしました。そばに来られるやスツと片膝について、車いすの私と視線を

合せて下さったのが忘れられません。

それから折に触れての、お便りのやりとりが続いています。万年筆で綴られた文面からは、シンプルな言葉でありながら、まっすぐこちらに向かい合って下さるまなざしが感じられ、頂いたお手紙は、どれも「宝物」になっています。

こんなこともありました。

寅さんの撮影が神戸であると聞き、喜び勇んで飛んで行きました。が、黒山の人ばかりで何も見えず、もう帰ろうと思いつながら歩いていたら、何と、道の向こうから山田監督が。

「乾さん、いらして下さったんですか!」「はい、でも、全然見えなくて…」 「じゃあ、よく見える所へご案内しましょう」

『男はつらいよ・寅次郎 紅の花』の神戸でのラストシーンには、だから、今も想いがひとしお…なのです。

豊中の上映会でお会いする度、「お元気でしたか?」と迎えて下さったお声と、横に並んで座り、肩を叩いて下さった手の温かさが、ずっと心に残っています。それを思い出す毎に、スクリーンで寅さんに会った時のように、知らず知らず笑顔になっていて、「つらいことも多いけど、生きていこう」と思えてくるのです。